

てはいるが一足の軍靴と巻きやはんがきちんとそろえて置かれている。

果たして持ち主と思われる兵隊は二〇メートルもはいった藪のなかで手榴弾で自決していた。

「俺はもう行けぬ、靴ときゃはんはくたびれてはいるがまだ使える。誰か俺の代わりにこれを使って頑張ってくれ」という心情が、痛いほど胸に迫った。当時、将兵は服も靴もボロボロといった状況であった。死の一瞬まで部隊と戦友に情をよせる優しい心が現役師団の強さの根源であった。

比島に無事上陸さえできれば現役師団の実力を遺憾なく発揮し、日米決戦の天王山に死を賭して戦い、国民の期待にこたえようとしたのだが、その意気込みが打ち砕かれ、将兵の落胆はかくせないものがあつた。』

〔その二〕

ある時期（昭和十三年頃まで）輜重輸卒は一般の兵隊からさげすまれ、一人前に扱われなかつた時期があつた。

昭和十四年頃から名称も輜重特務兵とかわり、一般兵

なみに進級も出来ることになった。

しかし山下氏にしてみれば、このことがよほどくやしかつたらしく、今回の聞き取り調査においても、繰り返し繰り返し私は輜重輸卒ではないのだということを発言されていた。

まして山下氏の所属されていた輜重第十連隊第二大隊（米倉大尉）はバレテ峠の激戦において自動車のハンドルを持つ手に銃をとって全滅に近い損害を受けながら、バレテ峠の正面第一線に撃って出たのである。

たたえてもたたえてもたたえ過ぎることはない。

船舶砲兵決死の対空対潜戦

兵庫県 倉本 寛次

—倉本さんは船舶砲兵だったと聞きましたが、船舶砲兵の方はたくさんいますね、貴重な体験が多いと思います。が、戦地はどこだったのですか。

私は大正十年一月二十三日に生まれて、補充兵とし

て、昭和十八年五月五日、船舶砲兵第一連隊要員として召集されました。集合場所は兵庫東加東郡河合村というところ（青ヶ原練兵場跡地）ですが三日しかいなかった。五月十日、船舶砲兵第一連隊教育隊（字品）に編入、第十一中隊に配属されました。

九月三日「阿蘇山丸」で字品発、大阪経由で四日に出發して十三日にパラオに着きました。船は三井造船所属で八千八百十二屯の貨物船です。

—倉本さんは輸送されたのではなくて、船舶の砲兵です。すから、その船の砲兵隊というわけですね、船にはなにを積んだのですか。

「阿蘇山丸」は上陸部隊を乗船させて輸送するのです。九月十八日にはパラオ発、ついで引きかえてマニラ経由でシンガポールへ着いたわけです。このときは「崎戸丸（九千二百四十五屯）」と「青葉山丸（八千八百一十屯）」と「阿蘇山丸」の三隻で船団を組んで行きました。そのときの私の船にはからのドラム缶を約二万本積んでいて、シンガポールの昭南ゴムの大きな倉庫にほうりこんだのです。

昭和十八年の昭南島（シンガポール）の町の辻には、友軍の歩哨が立っていて、目につきやすいところに、ピラがはってあった。それには「血潮流したマレーを守れ、岡部隊」と書いてあった。自分たちが船上で歩哨に立った時は、小銃に実弾をこめていた。夜間の場合、合図なく小船が近づいたら撃つてもよいといわれていた。その時にはもう、マレーもだんだんと厳しい情勢になっていたわけです。

十一月十九日シンガポール発、二十日ピントタン島（近い所で五、六時間ぐらいかかった）でアルミニウムの原料の赤茶色のボーキไซด์を、ベルトコンベヤーでカラカラと音を立てて積んだ。そこからマニラ、台湾の高雄経由で、十二月八日字品に着いて下船しました。

字品では、船舶砲兵第一連隊の高射陣地で警備をしていました。

—その間に空襲や潜水艦の攻撃はなかったのですか、その後は陣地勤務ですか。

この時は一〜二回戦闘体制にはいったことはあったが、別に攻撃は受けませんでした。

正月になって、二十二日に「新京丸」という大連汽船所屬の船に乗って、二十七日宇品発、マーシャル群島へ行くという東北なまりの人の多い部隊を輸送しました。

横浜へ行き南へくだりました。ジクザクで、ハノットぐらい船足の遅い船でした。サイパンに着いたが状況が悪くなった。敵の機動部隊が接近しているという情報はいったので、空船のままグアム島へ緊急退避しました。出港してから約一か月、二月二十七日のことです。

昭和十九年二月二十九日、東経百四十六度三十五分、北緯十度三十五分で、午前十一時頃、魚雷の航跡三本が「新京丸」に命中のコースで進んできたが、船のしたを通したのには全員びっくりしました。

グアム島に二三日待機して、サイパンにもどりました。部隊を再乗船させたのですが、降ろしたときの三分の一ぐらいになっていました。白い箱の遺骨を持った人をたくさん乗せました。敵機の機銃掃射でやられたんですよ。そのときの空襲で川西航空の四発（発動機が四つ）の飛行艇や格納庫も全部やられていて、みるかげもない。ガラパン港の隣の珊瑚礁の軍艦島の緑だけがきれい

だったが、狭い街だけど家もほとんどやられてしまったよ。船の上から見渡すかぎり、どこもかしこもやられていた。

―再乗船部隊をこんどこへ輸送したのですか。

トラック島へ行く予定だったのですが、その途中、出発してから一昼夜もかからないうちにやられた。私の軍歴書によると、三月二日、東経百四十八度四十分、北緯六度二十分対潜戦闘参加と書いてあります。

夜の九時ごろ、真っ暗でした。私は階段にいたが、そこへ魚雷があたって、とばされ腰を打ってしばらくウンウンいって立てませんでした。水が頭から滝のように落ちてきて、その時沈んだと思った。退船したら、丁度海軍のカッター（短艇）が助けにきてくれました。

船はまもなく沈没した。船に乗ったままの人や、魚雷の破片でやられた人もいた。下半身血だらけ、ももから下が失くなった人もいた。

―これが、三月二日の戦闘ですね。仲間は死にましたか。

名前は忘れたが、海防艦だったか、駆潜艇だかに乗せ

られトラック島へ上陸させてもらったのです。島には、柏部隊（第五十二師団）が駐屯していて、そこに居そうろうをしていたわけ。内地へ引き揚げた民間人の家で、十四～五人、防空高射砲の同じ小隊の者たちだが、うちの小隊はあまりやられなかった。死んだのは乗せた部隊の兵隊が多かったようです。

—その時、倉本さんは船舶砲兵でなにをやっていたのですか。

私は船舶の高射砲の砲手でした。第一連隊には高射砲や速射砲、機関銃があった。第二連隊には野砲もあったように思います。ほかの連隊のことはよくわからないが。トラック島には四～五日いて、内地に帰る船があった。三月十一日「和浦（かづうら）丸」に乗船、十三日トラック発、十六日にサイパン島にまた着きました。

—その間は無事だったのですか。

この間は無事だったが、三月十七日サイパン出発後、船団を組んだが、真っ暗闇のためにもわからなかった。ところがドドドドとやかましくらい機関銃の音がする。そのうち、ガンというものすごい大爆発がした。

雷が鳴ったように、火柱が立って、真っ暗闇のなか真っ赤になった。その船に命中したが、その船が分解して空中にまいあがり、バラバラと落ちてきて、また、もとの暗闇になった。翌朝起きたら、どこから飛んできたのかわからないが、高射砲弾のようなのが二つ甲板に落ちていました。

三月幾日だったか、横須賀に着いて下船して、「富士山丸」とかいうタンカーに乗せてもらい宇品着。四月二日下船し、もとの連隊の高射砲陣地で勤務していました。

四月二十九日に乗った「しゃとる丸」は、呉付近で衝突し、ドックにはいったため、五月二日下船。六月十七日、修理がおわったので、また乗船して宇品出港。七月九日、東経百二十五度十八分、北緯二十六度三十七分、敵の潜水艦と戦闘、こちらから撃った。

七月十六日、東経百二十度二十分、北緯二十九度三十分の対潜戦闘。この日私の乗った「しゃとる丸」は沈んだ。魚雷があたって轟沈というか、ドカーンと魚雷があたり、真二つに折り曲げられた。十～十五分ぐらいで沈んだ。

—その時はなにを輸送していたのですか、状況を話して下さい。

「しゃとる丸」は大阪商船籍の五千七百三十三屯の貨物船だった。場所はルソン島西北端マイライラ岬北西と記録に書いてありますが、フィリピンのリンガエンあたりじゃないですか。昼の十一時か十二時頃でしたかな、監視哨の交たいの時に魚雷があたった。二回ほど、物すごい音が二発あたった。続けざまに。船には六千人ぐらの陸軍軍人や、武器弾薬等が乗せられていました。乗船部隊はほとんど死んだろうと思います。兵器、弾薬、資材もろとも沈んだ。何隻の船団だったかわからないが、かなり船があった。私の船はそのまんなかを走っていた。平員は満載して鈴なりのように、そこからまるみえだった。まんなかの船をやったのだから、敵の潜水艦もずいぶんだいたんな攻撃をした。

船舶砲兵の戦死、不明者は三十六人だと、小隊長がいつていた。その時は中隊長も乗っており、高射砲四門積んでいたから、中隊で百人ぐらい乗っていたと思う。

—沈没した時の倉本さんの体験を、もっとくわしく話

して下さい。

私達は退船したけれど、私は助からないと思った。その時、沈没した船に巻きこまれた。物すごい水圧のきつところへ沈んでいく。耳からも目からも水圧が物すごい。体もしめつけられる。辛抱出来なくなって、海水を呑んだら元気が出た。つぎにまた、辛抱できなくなって呑んだら元気が出るどころではなく、物すごく辛くてえらかった。もう命がないと思った。だけど、体が案になつた。

水圧が少なくなつて、目の前が明るくなって、ぼつとすいめに浮かびました。救命胴衣はつけていたのだけれど、船が沈んだ時にまき込まれて助からなかった人が多い。

—よく巻きこまれず、我慢して生き残つたですね。

私はこんなことがあることを予期して、呼吸を止めて一分から一分半はこらえられるよう、自分で訓練していました。水を呑んでどのくらいの時間かわからぬがその訓練が良かった。必ずこういうことはあると思ひ、一生懸命訓練していました。お陰で怪我は無かった。浮かび

あがったところに柱のようなものがあつたので、それにすがりついた。周囲をみたら、かなり離れたところに、上陸用船艇のひっくりかえつたものがあり、底がうえになつていた。それに短剣（兵隊の牛蒡剣）の剣身を突き立てて、それにつかまつた。船の底にはつかまるところがないので、腰に剣を差したままだったのが幸運でした。

私は海へ飛び込んでから五、六時間後、海軍の海洋観測船の「凌風丸（一千二百屯）」に助けてもらった。縄はしごをさげてもらい、それにつかまって自力でのぼり助けられた。船には高角砲が一門あつたことを不思議に覚えていた。その船には三十、五十人ぐらい助けられていたかも。私は息もたえだえで、甲板にひっくり返っていた。のぼるのは自力だったが、あがつたら疲れきっていた。そのときは潜水艦だけで、空襲はなかつたと思うが、よくはわからなかつた。「凌風丸」は七月十九日にフィリピンのマニラへ着いた。サイパン玉砕の放送をそこで聞いたと思う。

— マニラについてからはどんな船に乗つたのですか。

もうフィリピン付近はきびしい情勢になつていたと思いますが。

マニラへ上陸して、大きな学校の体育館のアーチのしたで一夜をすごし、翌朝校舎にはいりました。自分の部隊の人だけで、たしか十人ぐらい、いたとおもう。小隊長の新藤少尉もいたので、三、四日間使役などをやっていた。そこは兵站宿舎だった。新しい船で七月二十三日マニラ発、八月七日字品着。その船で自分の中隊長とも合流した。中隊長も別の船で遭難したので、それからはず品—釜山間の船「めるぼるん丸」に乗って、十月十五日字品中船です。

十一月十七日、「日向丸」に乗船、二十一日字品発、十二月二日釜山着、十一日釜山発。その時潜水艦の攻撃を受けたが遭難はしなかつた。十二月十九日門司発、フィリピンに向かう。

十二月二十九日、フィリピンのサンフェルナンド着。晩に偵察機が一機来て照明弾を二、三個落とし、昼みたいに明るくなった。その晩空襲はなかつたが、三十日に物すごい空襲があつた。一緒の船団の船はほとんどやら

れていると思った。

「青葉山丸」はその時沈没した。船体が中央から真二つにさけた。焼夷弾を被爆したか燃えつづけていて、このままでは照明弾と同じで敵の目標になるので、部隊の船の砲を命中させて処分した。私はその時は「日向丸」の砲手だったので射撃をしました。

—倉本さんは、高射砲の砲手だったのですか。

私は七番砲手だった。敵機の航路の角度を表示呼称して、角度の修正をする系統の仕事をしていたのです。空襲を受けながら、飛行機の方角をみきわめて操作する。目盛は三百六十度の円形を、六千四百分割してあり、針の指しているところを、他の照準士に発唱する。「航路角、〇〇〇〇度」。被爆、銃撃を受けながらやるわけです。

一月一日、サンフェルナンド発、高雄港へ、その間、一月一日対潜戦闘、二日対潜戦闘、三日対空戦、対潜戦と、毎日航行しながらの戦闘でした。

グラマン艦載機ではなく、双発のノースアメリカンB25軽爆撃機（最初の本上空襲の機種）や、双胴のロッ

キードP38戦闘機が主でした。サンフェルナンドの時はミンドロ島がもう占領されていたので、そこから飛んできたらしいです。マストすれすれに飛んでくる。赤毛の操縦士の顔がはつきりみえました。

「日向丸」は十六か所のきず（被爆、被弾）があったが、みな水面よりうえばかりです。空襲ばかりで雷撃がなかったから沈没をまぬがれたわけです。

—その時の状況を、もう少しくわしく話しをしてください。

たしか、一月三日でしたかな、敵の飛行機五〜六十機にとり巻かれました。船団は三隻ぐらいか、戦爆（戦闘機と爆撃機）連合でした。とり巻かれたとき、中隊長は「必ず敵は攻撃してくる。全員鉄帽とれ、日の丸の鉢巻きをしろ、衛生兵は砂糖水を作れ」。私等は、これでこの世も見取めかと思った。それから、ブンブンと敵機は突っこんできた。しばらくは、砲撃、爆撃、機銃掃射で物すごく大きな声で号令しても聞こえない。海面には水柱が立っている。あたりはむごたらしいぐらい。

その日に同船団の「神州丸」が空雷撃で沈没したが、

私の「日向丸」は遭難しませんでした。そして、一月七日基隆着、十九日には基隆で対潜、対空戦体勢にはいってた。

—対空戦闘ののち、砲隊員や、船の甲板などの様子は
どうでした。

敵機が退散（撃退）したのちは、水柱の水で我々の体はびしょぬれ、顔色は全員土色でした。甲板の上には、金属の破片（爆弾の破片や、銃弾や、破壊された船の金属片など）が散乱しており、怪我人もあり、なんとも言えない後味でした。また「今の戦闘で、敵機十機撃墜、断じてくだらず」と聞いたこともありました。

—この船団はどういう船団ですか。

この船団はマタ（マニラ—高雄の意味）第四十船団というので、さきほどお話しした十二月二十九日、サンフェルナンド着、三十日空襲にあった船団です。

編成を調べてみましたら、「せりあ丸（一万二百三十八吨）」「日向丸（九千六百八十七吨）」「吉備津丸（九千五百七十四吨）」「青葉山丸（九千五百七十四吨）」「神州丸（八千六百六十吨）」の五隻です。これには第十九師団（虎

兵団）、滑空歩兵第二連隊等の比島増援部隊をのせて、さきほど申した。十二月二十九日、サンフェルナンド泊地に突入し、揚陸を敢行したものです。その時「青葉山丸」が被爆し我軍によって処分されたわけです。

—その後の行動はどうでしたか。台湾海峡日本近海も随分危なくなっていましたか。

船は一月十八日門司着、二十二日門司—釜山—基隆—宇品です。三月十九日には宇品で空襲にあつて、戦闘しましたが、翌二十日下船して広島砲兵教導隊に転属しました。

—広島では原爆に遭遇しましたか。

八月六日の朝です。私は分遣隊で、暁部隊の本隊から離れていたのですが、光や爆発音、爆風が、ピカ、ドン、ゴーと感じた。隣の学校の広島側窓ガラスは破れました。我々は、原爆の焼跡かたづけにでた。死体を運んだり、病院の医療品など運んだりした。

八月十五日の終戦だが、そんなことで、復員は九月七日です。原爆症はそのとき気付かなかったのですが、帰ってからわけのわからない腹痛がずつつづいた。私

はなにかしらと思っていたが、知らぬ間になくなった。医者もわからぬといったが、被爆者は腹痛が多いと聞いている。

私は被爆者手帳をもらうため、兵庫県庁から兵籍簿の写しを送ってもらったので、軍歴が比較的よくわかったから、対潜、対空戦の場所も、東経、北緯何度、何分までこたえられるのです。

なお、広島市には「船舶砲兵部隊慰霊碑」を守る会の本部があるが、今次の大戦で、輸送船などの船員約六万人が戦没し、船舶二千五百隻が沈没しているといいますが、いたがままで、船舶砲兵の人たちもたくさん戦没していますので、私もよくぞ生きて帰れたと、今でも思っています。

末期フィリピンの戦車隊で生き残る

広島県 弓井 崇 弘

「弓井さんは少年戦車兵学校出身だと聞きましたが、

いつごろ入校したのですか。

十五歳の時、昭和十六年十二月一日、千葉市の戦車学校生徒隊へ第三期生徒として入校したのですが、十七年八月、今の静岡県富士宮市に陸軍少年戦車兵学校が独立しました。二、三期生の時ですから、その時が学校の歴史の始まりということです。

二年間の教育で旧制中学程度の学業を身につける。午前中だけなのできびしく教育されました。午後は兵器、無線、自動車、戦車工学です。二年生になると、午前の学業はへって午後の実科が重点となり、戦車兵の下級幹部になれる教育になる。

卒業と同時に生徒から兵長になった。一週間ぐらいの休暇の後、十一月二十七日、関東軍の戦車第一、第二師団配属者が門司に集合した。三期生の卒業者は四百九十八人で一個師団に百七十人ぐらいたった。(戦車第三師団は支那派遣軍)。

「いよいよ大陸に渡るわけですが、満州での状況を。生まれてはじめて日本を離れるので、親に送られたが泣きの涙だった。かぞえ年十七歳だから。